

きいてくらしゃい 昔話

—長岡民話の会—会報第3号



暑かった夏も終わり、いつの間にか涼風にすすきの穂が揺れ、虫の音響く秋となりました。「秋深し隣は何をする人ぞ」(芭蕉) 皆様いかがお過ごしですか?お月様を眺めながら秋の夜長に昔を語るといのも風情がありますよね。さて、長岡民話の会報第3号をお届けいたします。秋の夜長、話の種にお読みいただければ幸いです。(干)



新メンバーのご紹介:

平成17年4月以降、たくさんの方がご入会されました。

- ・姉崎 功さん ・倉地 祐子さん ・高野 久美子さん
- ・長谷川 美代子さん ・柿沢 かずえさん ・南 由美子さん です。

皆さん早速いろいろとご活躍されています。

例会予定日: …当番班

- 9月14日(水) …3班 ○ 9月24日(土) …4班
- 10月12日(水) …1班 ○ 10月22日(土) …2班
- 11月 2日(水) …リハーサル ○ 11月26日(土) …3班
- 12月14日(水) …4班

事業予定日:

- 9月19日(祝) 語りつくしの会
- 11月 6日(日) 第2回発表会「きいてくらしゃい昔話」

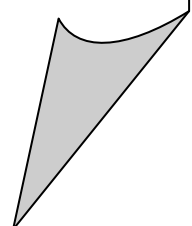
活動報告:

7月23日(土)「柏崎 語り部の会」の中川ナツ子さん、大掛きみ子さんお二人の大先輩よりおいでいただき、ご指導を受けました。20数名の参加があり、大変良かったと思います。

8月27日(土) 真人ムジナの遺跡見学会には11名の参加がありました。

ムジナの穴を実際に見せていただき、その穴をしっかりと保存しておられる若栃地区の皆様より盛大な歓迎を受け、とても有意義な会でした。

8月28日(日) 長岡市西地域図書館主催の「むか—しむかしのおはなし会」で、会員6名が出向き語ってきました。とても熱心に聞いていただき、次回の出前依頼や入会希望などいろいろな話が出ました。





3、「語りつくし越後の昔話」

平成3年、長岡で警女唄ネットワークが発足した。翌年私は、小千谷高校に転勤し、長岡がぐっと近くなった。その翌々年平成6年、長岡中央公民館で第1回「語りつくし越後の昔話」が警女唄ネットワーク主催で開かれた。そのチラシに私は次のような文を書いた。このネーミングは、私がつけた。

雪深い山懐に囲まれた村々に昔話は伝えられた。子供たちは婆々さの語る昔話に目を輝かせて何度も何度も同じ話をせがんだ。「湯も茶もいらんが山の猿のどこへ嫁に行ってくれや」と繰り返し聞いて、話の筋は忘れても、猿婿話のこの部分だけは覚えている。あの昔話はどこへ消えてしまったのか。子供達はファミコンゲームに夢中になってこんな話に耳を傾けることもしなくなった。村の語り部達は語りの機会を失ってむなしく時を過している。その間にたくさんの昔話を懐に詰め込んであの世に旅立っていった。昔話は我らの心の財産である。どんなにお金を積んでも買うことのできない貴重な宝物である。今、その語り部に思いきり語ってもらおうではなか。かつての郷愁の世界に浸り次の子供たちに我らの財産を語り伝えてゆこうではないか。

この日の出演者は、栃尾の林ヤスさん、守門村の馬場マスノさん、越路町の高橋ハナさん、小国町の山崎正治さんの四人だった。この昔話の話者達の思い出はつきない。

馬場マスノさんとの出会いは、なんと岩手県遠野市であった。遠野市は、柳田國男の「遠野物語」で知られる民話の里である。平成4年8月、岩手県遠野市の世界民話博に一人で出かけていった。ここで日本中から来た民話の語り手が昔話を語っていた。新潟県からは、馬場マスノさんと佐渡の小山さんが語っていた。馬場さんは「馬場マスノ昔話集」（平成3年 民話と文学の会発行）の本にまとまっている。マスノさんは、翌平成5年2月『小国雪祭り 警女唄と昔話の会』に出演していただいた。平成6年5月、私は守門村福山に馬場マスノさんを訪問した。明治38年生まれのマスノさんは、このとき89歳、病気で臥せっていたが、私の訪問で起きてきた。そして8月の長岡昔話出演を依頼した。なんとしてもそれまで元気になって出演するという。『語りつくし』では、鶴の恩返しや聞耳頭巾を語ってくれた。そしてマスノさんは、その年11月他界された。長岡の出演が最後の語りとなった。

栃尾市の昔話伝承者として市の無形文化財になっている林ヤスさんを知ったのは、いつだったか。平成6年、マスノさんを訪ねた折、足を延ばして、栃尾市新山のヤスさんを訪ねた。ヤスさんは、明治44年うまれ、「林ヤス百物語」の著書もある。ヤスさんは、ご主人が焼き物をやっている、2匹の蛙の焼き物を作っておられた。これはヤスさん十八番「広瀬の蛙栗山の蛙」の昔話をモデルにして焼物であった。広瀬は旧入広瀬村の地名、栗山は栃尾市の広瀬の隣接する地名で、その間の「石峠」という峠がある。栗山と広瀬に住んで

いた蛙が他の村はどんなであろうかと峠に登った。蛙は目が背中についているので、立ち上がると後ろが見える。二匹の蛙は、よその村をみようとして立ち上がったが、そこに広がるのは、自分の住んでいる村だった。それをよその村と勘違いした2匹の蛙は、「他の村も自分の村と変わらない」と思って、自分の村に引き返すという話だった。高橋ハナさんお昔話にも「荒巻の蛙と本与板の蛙」がある。林ヤスさんと話していて、実は私の兄高橋恒雄を知っているのに驚いた。兄は、栃尾南小学校で教員をしていたことがある。こうしてヤスさんは、第1回の「語りつくし」のマスノさんとともに出演され、「橋の夢」「栗山の蛙」「笠地蔵」を語ってくれた。その後、ヤスさんは、何回かこの催しに出演していただいた。まもなく、ご主人をなくされ、栃尾で一人くらししておられたが、今は、どうされているか。栃尾に行ったとき、娘さんの土田さんが昔話を語っておられた。

旧越路町の高橋ハナさんは、大正3年生まれ、旧越路町東谷阿蔵平で一人暮らしをされていた。ハナさんとは、平成5年、旧越路町で「越路町史」を作るといので、民俗部会の調査員として始めてお会いした。ハナさんは、自分の知っている昔話をノートに書きとめておられていた。それをコピーして、その頃使い出したワープロに打ち込んだ。それが137話にもなった。これをもとに越路町では、越路双書「ムジナととつつあー高橋ハナ昔話集」を発行した。ハナさんの語りの最初は、「おぐに雪まつり」だった。その後たいへんな評判を呼び、すっかり昔話の語りお婆さんとなった。東京表参道「ネスパス」で語ったり、積極的に県外にも語りに出た。鉄腕アトムで有名な虫プロでは、ハナさんの昔話をアニメにして、残すことになり、旧越路町では、三波春夫記念公園ができたとき、そばに「昔話語りの館」ができ、そこにハナさんの語りのテープが流れる施設を作った。越路町が昔話で町おこしをするきっかけになった。ハナさんは、どこでも出て行って昔話を語った。ハナさんの米寿の祝いと昔話語り100回記念のお祝いに招かれた。今年は91歳になられる。

山崎正治さんは、旧小国町法坂に住んでおられ、大正14年の生まれ、長らく小学校の教員をしておられ、授業の合間に昔話を語っておられた。教え子の同級会には、その昔話のことが話題になるという。昔話は余技で、郷土史家として中世山城研究家では、何冊かの著書も書かれている。旧小国町の郷土史はこの人なしには、語れない。昭和62年、「小国芸術村友の会」が発足した時には、この人に会長を引き受けてもらい、14年間続いた。近くに住んでおられるため、いつも気安く頼み、教えを受け、この先生との付き合いも30年以上になる。

こうして第1回「語りつくし越後の昔話」は、平成6年にこの4人の語りにはじまり、今年は12回目となった。昔話の語り手については下條登美さん、富川蝶子さん、鈴木百合子さん、樋口俱吉さん、南雲きくのさんと次々と書きたい人が浮かんでくる。



—おしらせ—

高橋先生のお話『長岡に伝わる民話』が長岡新聞（土曜日版のみ）に連載されています。皆様是非、ご覧下さい。



— ちょっといっぷく —



至福のひとつき

田島 明美

七月？日、柏崎から大掛さん、中川さんにおいて頂き交流会が開かれました。四班の方々の語りの後、先生やお二人の語りを聞き、いつもながら引き込まれるようなその語り口に感心いたしました。また、大掛さんから①一番後ろの人の頭の上に音をのせる。②客席の三分の一より上を向いて話す。③顔は動かさない。等々のアドバイスを頂きました。

自分達だけの練習会だとどうしても自己満足で終わりがちですが、このように諸先輩方の語りに接するとことは勉強になることが多く、語りの会の在り方など考えさせられることもあり実に貴重でこれからもたくさん交流したいと感じました。

また、小千谷の若栃を訪ねた時も感じたことですが「昔話」という共通の世界を持つ皆様と過ごすということは性別・年齢・職業の垣根を越え、とても心地よいものですね。

どんなに機器が発達しても、人の声に勝るものは無し！人が人のために語るって本当にあったかいです。

心づくしの漬け物サラダ、お菓子等も美味しかったです。至福のひとつきでした。

ありがとうございました。

ムジナ穴の里「若栃」

安藤 和美

去る8月27日に高橋先生の学生時代の思い出の地であり、民話にもよく登場するムジナの穴が有るといふ若栃の里を訪れました。

さすがに「真人ムジナ」と命名され、一説では佐渡まで続いているという底知れぬ大穴にちょっぴり恐ろしくなりました。

当日は祭りの日にもかかわらず町内を案内して頂き、有り難いことに風情のある境内に設けられた席で話をお聞きすることができました。

町にはムジナの穴だけでなく十二神社の狛犬や正応寺の山門、お堂に掛かる古い俳句大会の額、そしてその頃から現在に続くのではないかと思われるような俳句の会など、お聞きすればするほど豊かさが感じられました。

私の町では地震後そのままになっている鳥居やお堂をこの里ではいち早く建て直されたということからも伝統や文化を大切にし、生活（暮らし）の中に脈々と受け継いできた里の方達の心意気が伝わってきました。

里に到着した時に何か懐かしく優しいものを感じたのは古い家並みのせいだけではないのだと思いました。

時代なののでしょうか？たくさんの新しい文化が生まれる中で大切なものが失われてゆく現在（今）だからこそ、伝統や文化という失ってしまうと取り戻す事ができないものを受け継いで欲しいと願いながら、「また来たいなあ」と里を後にしました。